

田中三也さん

1923(大正12)年11月25日生

海軍

- ① [1939\(昭和14\)年10月、甲種飛行予科練習生に志願\(第5期生\)](#)
- ② [1942\(昭和17\)年7月、重巡洋艦「利根」に配属](#)
偵察員として南太平洋海戦に参加(零式水上偵察機)
- ③ [1943\(昭和18\)年 特修科偵察術練習生の教育](#)
- ④ [1944\(昭和19\)年1月 第151海軍航空隊でトラック島へ](#)
- ⑤ [同年5月 あ号作戦挺身偵察](#) ツラギ、アドミラルティ方面の挺身偵察に成功し、連合艦隊司令長官から個人感状を授与される(二式艦上偵察機)
- ⑥ 1944(昭和19)年10月 第141海軍航空隊偵察第4飛行隊でフィリピンへ
- ⑦ 1945(昭和20)年 第343海軍航空隊で松山に、第171海軍航空隊で鹿屋に
沖縄方面の偵察(彩雲)



① 甲種飛行予科練習生(5期)

- ・ 予科練に入隊したときの年齢は、15歳と10ヵ月で、いまでいう高校1年生の二学期だった。1939(昭和14)年9月、一次試験に合格した若者数百名が、全国から霞ヶ浦海軍航空隊の予科練習部へ集まった。飛行機乗りとして適正検査20数種目の試験を受けた。種目ごとに判定が宣告され、不合格になるとそこで帰宅しなければならない。最後に人相・手相の判定もあって、500名が残り、最後の発表で260名が合格となった。

実用機課程と日米開戦

- ・ 1941(昭和16)年3月、予科練過程を修了し、操縦組が筑波・谷田部・鹿島の航空隊へ、偵察組129名は鈴鹿航空隊へ入隊した。そこで8ヵ月の練習機過程を修了すると、いよいよ実用機課程に進むことになり、陸上機と水上機に組み分けされ、12月6日付で大村・宇佐・博多の各航空隊に入隊を命ぜられた。水上機に入れられた私は仲間37名とともに博多へ向かった。入隊早々の12月8日、ラジオ放送で、わが連合艦隊がハワイを奇襲したことを知った。そして大勝利の戦果に「万歳、万歳」で盛り上がった。

実施部隊への配属

- ・ 1942(昭和17)年2月、飛行練習生の全過程を修了し、実施部隊に配属されることになった。卒業したということよりも飛行術の特技章を左腕に付けられることがうれしかった。4名の同期とともに舞鶴航空隊へ配属になった。
- ・ 4月になって、いよいよ転勤の命令があった。転勤先はビルマのラングーンに進出している第十二特別根拠地隊である。インド洋のアンダマン諸島に布陣の予定。戦地への転勤であり、ますます士気は上がった。

② 重巡洋艦「利根」に配属

- ・ 1942(昭和17)年6月下旬、突然本部から呼び出しがあった。連合艦隊への転勤命令で、八戦隊の重巡洋艦「利根」への乗り組みである。
- ・ 同年8月16日、瀬戸内海の柱島を出港。作戦の詳細は知る由もないが、出撃の目的はガダルカ

ナル島奪還の部隊の支援と敵の空母を捕捉撃滅するというものであって、目的も命令も聞くことすべてスケールが大きかった。(第二次ソロモン海戦)

- ・ 同年10月26日、暗夜の南太平洋を東に出撃した。(南太平洋海戦)

③ 特修科偵察術練習生の教育

- ・ 1943(昭和18)年夏、偵察特練の教育を受けるため、重巡洋艦「利根」を退艦し横須賀航空隊へ入隊した。教育の内容は遠距離航法、局地偵察法、艦型識別などが主で、当時としては最高の偵察教育であった。1カ年の予定が6ヶ月に短縮された関係上、日夜猛訓練の連続。

④ トラック島へ

- ・ 1944(昭和19)年1月修了し、ラバウル151航空隊勤務を命ぜられた。151航空隊は偵察隊で、菅原少佐を隊長に彗星6機、乗員20名の編成。
- ・ 当時のラバウル行きは死を意味していた。しかし本隊はすでにトラック島に移動していたので、彗星偵察機(二式艦上偵察機)でトラック島の春島基地へ着任した。トラック島は日夜敵の爆撃を受けたが、ゼロ戦・月光夜戦などの戦闘機の活躍も目ざましかった。敵のトラック島への進攻も予想され、毎日索敵が続けられた。食料(米)もタバコもだんだん欠乏してきた。

⑤ あ号作戦挺身偵察

- ・ 1944年(昭和19年)5月3日、豊田 副武(とよだ そえむ)海軍大将が連合艦隊司令長官に着任。(前任の古賀峯一大将の遭難・殉職を受けての着任。) マリアナ、西カロリン諸島、ニューギニア西部を死守すべき任務を引き継いだ豊田司令長官が、この防衛線に米軍がかかってきたときに全艦隊兵力と全基地航空兵力を集中して、一挙に退勢を挽回しようと計画したのが「あ号作戦」であった。
- ・ 当時米軍の進攻作戦は、ニューギニア西カロリン諸島からフィリピンに向かうマッカーサーラインと、中部太平洋の島々を占領して来るミニッツ・ラインがあると考えられていたが、どこに来たときに攻撃をかける好機であるかということが問題であった。5月の初めから、通信状況は大規模な敵軍の上陸作戦が起こることを示していたが、その方向はニューギニア方面か、マリアナ方面かわからない。
- ・ 5月25日、命令がついに出了。「あ号作戦挺身偵察」の決行である。ツラギ、フィッシュハーヘン、アドミラルティなど南方方面と、メジロ、ブラウンなどの東方方面での、敵艦艇の偵察が主任務である。私は南方挺身偵察を命ぜられ、猛訓練の見せ所と奮い立った。「挺身」の文字通り、片道を予想しての決死行である。中継基地のブインおよびラバウルは使用不可能な日が多く、特にブイン基地は敵に包囲されている現況である。
- ・ 操縦員はソロモン方面ならチャートなしでも行動できる森田飛曹に決まり、決行日は5月27日の海軍記念日とした。26日、1日ばかりで準備万端整う。航空カメラは焦点距離500ミリの望遠で、高度1万メートルを予想して酸素もじゅうぶん充填した。出発当日、滑走路の両側は見送りの人で一杯。施設隊の青シャツ部隊総員が日の丸を打ち振って見送ってくれた。水盃で出発したのははじめて。あらためて挺身偵察に任務の重大さを身に染みて感じ、この人達ともこれで「お別れだ」と思った。
- ・ 午後1時きっかり離陸、トラック島・春島をあとに、一路ブインへ向かって南下した。敵の目を欺くためである。ブインまで800海里(約1482km ※東京-沖縄間が1,537km)、夕方までにブイン海岸

に到着し、ジャングルをすれすれに飛ぶこと20分、目的の飛行場を見つけた。爆撃でひどい穴が開いている。上空を旋回すると、ジャングルから三々五々人影がでてきて手を振り出した。中央の幅10メートルくらい穴を埋めて修理した滑走路に着陸。飛行機はジャングルの奥深く隠し、守備隊へ報告に行く。皆、日本の飛行機を見るのが久しぶりであり、なかには日の丸を見て涙を流していた者もあったとか。報告をすませて持参のタバコを配った。守備隊の食料はイモと野菜。それも畑は爆撃でやられ収穫もわずか。敵は上陸し包囲されている状況で、煙ひとつあげられないという。

- ・ 11時に就寝、午前2時に起床。夜間爆撃があり、滑走路の穴を徹夜で修理したところだと20～30人の隊員が飛行機のそばで休んでいた。飛行機の燃料も手押しポンプで満タンにしてくれた。離陸目標は滑走路の先端で隊員が廻らしているランプ1個だけ。少しでもそれたら最後、穴へ落ちてしまう。危険このうえない。しかしまごまごしておれない。すでに敵には感づかれている。夜間爆撃と盛んに打ち上げる信号がそれを物語っている。
- ・ 上昇しながら海上を東へ針路をとる。夜明けまでにガダルカナル島の東へまわり、目的地ツラギに接近する作戦である。ツラギはガダルカナルのすぐ北にあり、多くの入り江があつて艦隊の停泊地に適している。天候がよいので高高度偵察を決意し、高度1万メートルまで上昇した。気温は零下40度、ツラギ上空は晴れあがって明るさも十分。ただちに進入開始。眼下にみえるソロモンの島々は箱庭でも見ているようである。偏流測定器で目標を確認し、針路を調整しながら接近する。風は追い風の70ノット。いよいよ上空に差し掛かった。カメラの穴の扉を開く。とたんに冷たい風が吹き込んでくる。撮影開始。あらかじめ用意したメモ版には、次々に状況を記入する。空母、戦艦、巡洋艦、駆逐艦、海トラ(海上輸送の小型船)、いるわいるわ接近するにつれ、その全貌が眼下に展開された。輸送船ものすごい数だ。出港中の艦艇の記入も大事だ。ほんの2、3分の間である。無事上空を通過した。カメラのスイッチを切った。

※以降は資料2につづく（明日、5月23日のウェブ茶話会でお話を伺います）